

皆様おはようございます。今日は1年の最後の礼拝の時を迎えております。今年1年もコロナコロナで1年不安と恐怖の中におりましたけれども、そのような暗闇の中にも神様の光が、救いが、導きがあったことを心から信じ感謝いたします。

先週イエス様の御降誕をお祝いいたしました、その引き続きの聖書の箇所から味わいたいと願っております。

シメオンとアンナと言う人が出てきます。

その前にイエス様の両親は主の律法通り、その子を主に捧げるためエルサレムに連れて行きました。聖別のための捧げ物と、長子の捧げものをささげるためでした。

山鳩ひとつがい、家鳩の雛二羽と書いてありますけれども、40日目に清めのいけにえを捧げることはレビ記十二章に書いてあります。清めのいけにえは一歳の子羊一頭と家鳩の雛か山鳩一羽ですが、豊かでない人は二羽の山鳩か、二羽の山鳩の雛で許されたのです。

ヨセフ夫妻がこれを用いた事は、彼らの貧しさを物語っています。救い主イエス様を宿した家庭は、何不自由ない家庭ではありませんでした。庶民の家でした。生活の苦しさ不安、やるせなさを感じる、そういうごく普通の家庭の中にイエス様はお生まれになりました。

さてシメオンとアンナという人の信仰深い生活、聖霊によって導かれる生活がここには記してあります。

今日は聖霊に導かれたシオンとアンナ、この2人の聖霊によって導かれてあるその生き方に目を留めていきたく願っております。

25節そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。

正しい人で信仰があつくとありますが、正しい人と言うのは、神様の標準、御心のご意思、そのご性質をじっと見つめて、それに従う、順応する、合致する、適合する、同一化するという事を意味します。

神様の標準、神様の意志、神様の御性質に従い、同一化していく歩み。それを正しいと言うふうに聖書は表します。

いつも神様を目の前に置いて、憧れであるお師匠様、人生の中心である神様をいつも目の前にして、その方に心をより添わせ、似たものとされることを最上の喜びとしていくこと。神様の標準、ご意思、神様のご性質に似せられ、ついには同一化されていくことを願う。それがここで言う正しいと言う意味です。いつも神様の素晴らしさ、神様の教えとご性質に照らして自分が導かれたいと思いつけること。これが正しい人生です。自分の人生が、私たちが愛してその

身を十字架にさえかけて下さるお方と呼応するものになり、愛して下さる方と共通することを願い、そのお方に引っ張られて行きたいと願っていること、それが神様に会って正しいということ、信心深さであるという事を学びます。神様を中心とした生き方これが聖書が言うところの正しいという意味であり、信仰深く、経験であるという事です。信心深いということはその中から出てくる言葉です。

自分の悟りでも信念でも心情や経験でもない、自分の大切にしている持ち物や目に見えるものや人が助けではなく、ただ神様を見上げ神様ご自身を味わい合致して適合して同一化していくこと。神様を待ち望み、求め、喘ぎ手を伸ばし、神様がどのような方でいらっしゃるのかということに常に関心事として、神様の標準を、神様のご性質を常に自分の身に適用させていくこと。

それを味わい、深め、神様を待ち望んで一体化を望んで生きていく。それが信仰深くあるというあり方であるということを教えられます。

そのような人がどのような行動に導かれるかと言えば、「イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。」とある通りです。

自らの同胞、信仰の共同体のイスラエルが慰められるのを待ち望むと言うことでした。彼はまだこのイスラエルが十分に助けを得て慰めを受けていて、自立していると言うふうに思っていました。多くの多くの苦しみがあり、闇があり、混沌があり、不条理があり、未完成なところであるということを常々思っていました。ですから彼は、真剣に神様が神の民、イスラエルへ慰めを与えて下さるように祈っていました。

事なかれ主義ではなく祈りの目を見開いた現実主義者でした。彼はわが民の至らなさ不条理に気づき、問題意識を強く持って心から痛みを感じていました。他人事とは思っていませんでした。慰められること、助けられること、そして救いを得て自由にされることを祈り続けていました。

救われているから、守られているから大丈夫だ。それは確かにそうなのですが、しかしまだまだまだまだ神様の慰めが、救いが私たちには必要なのではないかと思います。群れのためにとことん心を注いで、至らなさを乗り越えていくために祈る祈り手。賭けは本当に群れのために必要な祈りを捧げ続けていました。この点で私たちの祈りはまだまだ足りないのではないかと思います。このように深く深く至らない所を、神様の御力によって助けていただき、慰めていただき、もっとこの信仰の共同体が力強いものとなるように祈り続けていくこと。これが聖霊にある人の生き方でした。神様を深く深く望めば望むほど自らの足元を見て至らなさを思い、問題意識をもって執り成し祈る。大丈夫だと楽観的にならずに、群れのために率先して祈ること。これが聖霊に生きる人の生き方です。

そして 26 節そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。

このように神様の慰めを深く祈り、信仰の共同体のために慰めと救いを祈る人にはメシア、救い主との出会いがあります。救い主に必ず出会よとのお告げを、開示を、啓示を聖霊から受けるのです。

ヘブライ 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。

神様を信じて熱心に祈る人を神様は失望させられません。

2:6 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」

あなたがそう願っている事に対する救いをあなたに与えて下さいます。主は祈りを起こさせ、祈りを聞いてくださいます。御業を告げ、現わして下さいます。「あなたは私それを見るまで決して死なない」と語り励まし、生きてるうちに必ずその救いを見よとの確信を与えて下さいます。

聖霊による人は、確信に満ちた祈りが与えられ、その祈りが聞かれ、救いを見よという体験をします。

私たちが同胞のために国のために祈り続けることを諦めずに祈り続けている時、聖霊はあなたの祈りが聞かれた、あなたはその救いを死ぬまでに必ずあなたの目で見よとのお告げを与えて下さいます。

深く深くあきらめることなく、信仰の共同体のため、慰めのために自らのためだけではなく、同胞のため教会のため、国の為、世界の為に祈り続ける人のために神様は、そんな祈り手である「あなたはその救いを必ず見る」との約束を与えて下さいます。

27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。

そして霊に導かれて神殿の境内に入ってきたとき、シメオンはついに救い主に会います。両親は幼児のためにいけにえを捧げようとしていました。それはお金持ちの家の赤ちゃんではありませんでした。外目に、決して目立つ家族ではありませんでした。しかし聖霊によって進んだシメオンはそれを我が主による救いが完成した時なのだと、瞬時に理解することができました。祈っている人に

は、事の次第が分かるのです。祈りに従って救いが訪れたということが分かるのです。

29 節 2「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。

2:30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

ここにも「お言葉通り」というクリスマスのフレーズが現れます。

クリスマスのストーリーです。「恐れるな」「神には何一つできない事は無い」そして、「お言葉通り必ず実現すると信じた人はなんと幸いでしょうか」です。ここにも神様の生ける約束は成就しています。私はこの目であなたの救いを見たのだから、今こそあなたはお言葉通りこの僕を安らかに探してくださいと語ったシメオンは、神の民の慰めのために祈る時は過ぎ去り、今まさに神様は願いを果たしてください、自らの祈る責任を解いて、救い主にすべてを委ねて、祈りのじょじゅの後に安らかに去らせていただけると確信しました。ちょうど夜中番をして、買っていた羊飼いのために見守っていましたが、夜ずっと番をして祈っている人が朝交代の人が来るまでは絶対に私はこの仕事を投げ出さないと、目を見開いて番をしている人とシメオンは似ています。

今こそあなたは救いを見せてくださいましたからあなたの僕は安らかに去ることができる。この救い主の助けがあるのならば私は安らかに去ることができる。それまではこの救いを見るまでは、慰めが訪れるまで私は絶対死なない。祈り続けるとその役割を決して緩めることなく果たしていた人は、素晴らしいその後任の人がやってきてその人に託して仕事を終えて家に帰っていく人のように、シメオンもまた安らかにこれで命を閉じることができる、何の心配もないと安堵します。そのよう彼は高齢になりとも、常に命がけで世界を守るために、慰めるために祈り続けていたのです。叶えて下さらなければ死に切れませんとの彼の熱い祈りは神様に通じていました。彼の迫力ある祈りを思います。アンナもまたそうでした。神殿を離れず、断食したり祈ったりして彼女もまた、夜も昼も神に仕えていました。エルサレムの救いを待ち望んでいました。そしてここに彼女にも聖霊によって救い主の誕生を示され皆に幼児のことを話しました。

シメオンの予言の言葉に戻ります。

2:28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

2:29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。

2:30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

2:31 これは万民のために整えてくださった救いで、

2:32 異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」

2:33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。

2:34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。

2:35 ——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせずするという言葉があります。

イエス様はしばしば躓きの石と呼ばれましたが、本来人はイエス様に躓いてはならないのです。自らを低くしてうやうやしくこの石を頂き、この石の上に生活をかけて行かなければならないのです。しかし人はこのイエス様を見て、神様の標準と意志とに自らを懸け、自らを同一化させようとしなければならないのですが、自分の思いを優先して、神様を邪魔な躓く石のように考えてしまいました。そのように神様に自分を同一化するのではなくて、自分に神様を同一化しようとするその人間の自我はいちど倒れなければなりません。悔い改めて神の前に倒れ、破綻して神様の前に降参して倒れなければならないのです。そうすれば、イエス様の復活と共に倒れて後立ち上がることができます。

「立ち上がる」という言葉は、「復活」と言う意味を持ちます。

イエス様はご自身、人の救いのために十字架に倒れそして3日目に復活してくださいました。反対を受けるしるしとして剣がイエス様の体を差し貫き、母マリアも心の奥底から悲しみを味わいますが、それは多くの人の心にある思いがあらわになり、残虐性が、罪の性質があらわされるためでした。心の奥底がさらされ、そして懺悔する時に、私たちは十字架の上に、「彼らの罪を許してください」と先んじて祈られたイエス様の御声を聞くのです。

人の心が余すところなく神の前に現れされ、そしてある人は悔い改めそしてその人は立ち上がることができます。イエス様は批判の矢面に立たされ、十字架にまでつけられます。人の罪を表面にあらわにし、そして人の罪に気づかせそこに救いの十字架を用意して下さる神様のこの恐るべき救いが異邦人を照らす啓示の光です。このイエス様の苦しみの中、贖いをなして復活するイエス様のお姿を拝し、私たちはかたくなな者にならず神の前に神を第一として聖霊によって導かれて進むものでありたいと思います。

「この目であなたの救いを見る」、そのために神様をいつも目の前に置いて、そして熱く、教会の、世界の同胞の救いのための、慰めのための祈りを捧げましょう。この祈りが聞かれるまで私は決して死ぬわけにはいかないのです、あなたの御救いを見せてくださいと祈り続けて参りたいのです。

そこに神様私たちの祈りに答え、私たちの周囲そして国に世界に神様の救いを見せてくださることでしょう。安らかにその救いをこの目で見て私たちもやがて、天に帰っていくその時まで、私たちはイエス・キリストによる救いと、イエス・キリストによる慰めを祈り続けて、命を捨てる良き羊飼いを語り続けていきたと願うのです。